〔箋注倭名類聚抄八蟲名〕古事紀垂仁條有錦色小蛇、亦恐是、○略中　按埤雅云、蚺蛇身有斑文、如故暗錦纈、與此義同、又按說文、蚺、大蛇可食、玄應音義引字林云、蚺大蛇也、可食、大二圍、長二丈餘、郭注海內南經云、今南方蚺蛇吞鹿、鹿已爛、自絞於樹、腹中骨皆穿鱗甲間、出本草、蚺蛇膽注陶弘景曰、此蛇出晉安、大者三二圍、蜀本圖經云、出交廣二州嶺南諸州、大者徑尺、長丈許、若蛇而麁短、田村氏藏蚺蛇皮、其大如陶氏所說、是恐非源君所訓者、輔仁蚺蛇無和名、邇之歧倍美、當是今俗呼也、万加々知者、

〔類聚名義抄十蟲〕蚺音髯　シキヘミ

〔本草和名十六蟲魚〕蚺蛇仁謂、音而詹反、大蛇也、北行黑血、黑蛇血也、出兼名苑、

〔日本書紀六垂仁〕五年十月己卯朔、天皇幸來目居於高宮、時天皇枕皇后膝而晝寢、於是皇后既無成事、而空思之、兄王所謀適是時也、即眼淚流之、落帝面、天皇則寤之、語皇后曰、朕今日夢矣、錦色小蛇、繞于朕頸、復大雨從狹穗發、而來之濡面、是何祥也、皇后則知不得匿謀、而悚恐伏地、曲上兄王之反狀、因以奏曰、妾不能違兄王之志、亦不得背天皇之恩、○略中　唯今日也、天皇枕妾膝而寢之、於是妾一思矣、若有狂婦成兄志者、適遇是時、不勞以成功乎、茲意未竟、眼涕自流、則擧袖拭涕、從袖溢之沾帝面、故今日夢也、必是事應焉、錦色小蛇、則授妾七首也、大雨忽發、則妾眼淚也、天皇謂皇后曰、是非汝罪也、○略下

〔古事記傳二十四〕錦色小蛇、ニシキイロナルヘミ小蛇は幣美と訓べし、○略中　錦色とは錦の如くなる文のあるを云なり、然る一種の蛇あり、和名抄に蚺蛇、文字集略云、蛇文如連錢錦也、和名仁之木倍美とあり、埤雅に蚺蛇尾圓無鱗、身有斑文如錦纈、とも云り、但和名抄に仁之木倍美とあるは、小蛇なるべきに、本草を考るに、蚺蛇はいと大きなる物なれば、此漢名は當らざるが如し、○下略

〔八幡愚童訓上〕御殿ノ內ヨリ五色蛇ハイ出テ、清丸○和氣ガ脛ヲ舐ルニ如元足ニ成シカバ、○略下

〔行縢餘錄出雲〕十月は、神あり月とゝなへ、十一日より十七日まで神ありのものいみといへることのありて、御社近き五十田狹之小汀く高波うちよせて、にしきのあやある、龍蛇、一ッあるは二ッもあがれるをきよらなるものへのすれば、わだかまりてうごかぬを、國造とりて御社へ奉るに、日